

日光廟の建築

私共は、平生から日光の結構と云ふ事は度々耳にして居たが、此度いよいよこの結構な日光廟の建築を見た。成程結構だとは思つたが、これが建築上どんな價值を持つてゐるかを知つてゐたならば、もつと深く興味を感じた事と思つて、主として史蹟名勝天然記念物保存協會の編纂に係る『日光』と、東京帝國大學紀要工科第一冊第二號『日光廟建築論』に依つて調べた。その結果を御紹介すれば大体次の様である。

一、建築の由來

日光は元フタラ(二荒、後に日光と改字す)山と云ひ今より凡そ千二百年前稱徳天皇の御宇に勝道上人が創めて此處を開いて、四本龍寺を建てた。これが今日の輪王寺の起源である。二荒山神社も亦同時代に同上人の勸請によつて出來たものと云ひ傳へられて居る。即ち日光山は輪王寺と二荒山神社との境内であつたのである。

此境内に、家康公の靈廟が造營せられた。これは二代將軍の元和二年十月から翌三年三月迄かゝつて、本多正純、藤堂高虎の奉行の下に造營せられ、後三代將軍家光公の時に改築せられた。これが今日現存してゐる東照宮御廟の建築である。此時の改築は、寛永元年から同十三年に至るまで十三年間の繼續工事であつて奉行として松平右衛門大夫正綱、秋本但馬守泰朝の兩人がその經營に當り、大棟梁甲良豊後宗廣が工匠としてこれに従事した。甲良は所謂建仁寺流の巨匠で、大棟梁として幕府に仕へ、日光廟建築の考案設計も皆彼の頭腦から出たものと見られる。當時の工事は元和の御廟よりは餘程擴張されたものではあるが、廣い土地

に獨立に建築せられたものではなくて、神社及び佛刹の境内に篋め込むで造られたものである。

其後慶安四年二荒山神社の境内の一部分に家光公の御廟が造營せられたので、それは承應二年を以て落成して居る。その上に天海僧正の廟即ち慈眼堂等各種大小無数の建築が追々と建てられたので餘程複雑になつて居る。此等無数の建築は各々廣い土地に獨立に建てられたものではなくて、輪王寺と二荒山神社との境内に篋め込むで造られたものである。この事は日光の建築を論ずる上に先づ以て考へに入れて置くべき重要な事件である。以上は日光建築の由來の大体である。

二、建築の方針

こゝでは其代表的建物である東照宮と、大猷院の御廟とを抜き出して書かうと思ふ。

兩廟の配置は大部分の方が御承知であり、又御承知でない方も孰れ御覽になる事だらうからこゝではこれを省く。

さてその方針と云ふても當時の奉行并に建築家等がどう云ふ方針を決議したかと云ふことは、具體的に記録がないので實物を研究した結果から逆に見ると、凡そ次の九ヶ條の方針を以て建てられた様に考へられる。

1 規模は大なるを要せず只精巧優美ならむ事を要す。

例へば日光東照宮に屬する一切の建物の大きさは、東京淺草の觀音堂の二倍に足りない。又東京驛に比べるところの三分の一しかない。それに反してその總工費は今日の相場に換算して見ると約二十萬圓と云ふ額に上る。これを一坪平均にすると約二萬四千五百圓を要して居る、殊に陽明門の如きは一坪に約十五

萬圓を投じて居る。一坪について十五萬圓と云ふ工費は確に世界無比と斷言して憚らない。即ち形は小さくても出来るだけ立派なものにしようと思へられたものと見られる。

2 社殿の配置は緊密にして散漫なるべからず。

東照宮は今日は別格宮幣社に列せられて居るが、元來は御廟であるから建築の性質上神社でもなければ佛寺でもない。従つてその配置は神社と佛寺とを混和した即ち權現造りで、而も其の最も完備したものである。其配置は從來のやうに神社の境内に五重の塔を立てたり、或は佛堂を建てたりしたやうな有り來りの神佛混淆の配置とは違つて神社的建築と、佛寺的建築とが巧に織り込まれて、一つの組織に纏つたものである。例へば仁王門があると思へば鳥居があり、鐘樓や經藏があると思へば水盤舎、神庫があり、本地堂や藥師堂があると思へば、拜殿や本殿があると思ふ風に、佛寺的建築と、神社的建築とが巧に織り込まれて居る。この組織はこれまでに決してなかつたもので、建築に一新機軸を作つたものと云ふ事が出来る。

一體本邦の宗敎的建築の配置には古來二様の別がある。第一種は、各種の建物を中心軸に沿うて前後左右均齊に配置する方法であつて、多く平坦な地盤に用ゐられ、森嚴で單純な性質を帯びて居る。奈良朝の佛寺及び禪宗伽藍等は此配置法に依つて居るものである。第二種は、第一種の如く整然としたものではなくて、山岳陵丘等天然の高低に應じて極めて自由な配置をして居るもので、婉曲で變化に富むで居る。伊勢大廟、佛寺では天台眞言二宗渡來以降のものはこれである。

翻つて我日光廟建築は果して二種の中孰れの配置法によつて居るか云へば、寧ろ第二種の配置法に近

い。即ち初めの入口の鳥居から終りの本殿に至るまで段々左右均齊の位置に近づいて行つて、一番奥の本殿廻りに至つて最も嚴密な左右均齊になつて居る。例へば入口の鳥居を入ると左手に五重の塔があつて右手には何もない。これは全く左右均齊を破つて居るものと云はれる。仁王門を入つて水盤舎の前から左に折れて行くところの神庫に對して左に輪藏がある。輪藏の方は形が小さいが其の代り丈が高いので稍左右均齊に近づいて居る。それから進んで石段を登つて行くと、左に鼓樓、右に鐘樓がほとんど同形で相對立し、こゝに始めて眞の左右均齊を表はして居る。これから内は常に左右均齊を保つて居るが、唯唐門の廻廊が東手に延びてこの均齊を破つて居る。これはこの部分から坂下門を出て奥院に行くこと云ふ事を暗示して居るので特に意味のある不均齊であるから、至極適當な配置法と思はれる。

3 自然の地形に従ひ樹木は可成これを保存すべし。

例へば仁王門を入ると、參道が鈍角に折れてゐたり、又建築の均齊を破る様な事になつて居るのは在來の樹木を避けたがためである。

4 社殿の構造は耐久なるべし。同時に又耐火、耐寒、耐濕たるべし。

例へば本堂の下に大盤石の土臺石を使つたり、石垣の石を表面に表はれてゐる大きさの二倍乃至三倍も深く埋め込むのである様な事は、一方には耐久の目的であると同時に、冬期地面が凍つて、建物が下から持ち上げられる事を妨ぐため即ち耐寒の目的をも兼ねて居る。又全部漆塗にしたのは耐濕の目的で、屋根を銅で葺いたのは、耐火且つ耐久の目的である。

5 建築物の形式手法は個々の形を考へずして、全体としての體裁を考ふべし。

例へば三つ並んでゐる神庫の屋根がそれ／＼違つてゐたり、厩の破風が左右長さを異にしたり、獨特の形式を備へてゐる陽明門があつたり、四方複雑な唐破風になつてゐる唐門があつたり、權現造（永田町 日枝神社、神田明神、根津權現等の建築のごとき）の本殿があつたりして、いろ／＼の形のものを取り交せて配合を試みて居るので、當時の宗教的建築の一大博物館と云ふ事が出来る。一つ一つの建物について見ると多少如何と思ふ様な點がないでもないが、全体としての變化の有様を見ると、大体に於てよく纏つて居る。

6 細部の意匠は嶄新なる獨創的のものたるべし。

例へば陽明門の柱の表面に屈輪を一面に彫刻したり、大猷院の拜殿の内部の長押に、凹凸の刳り形が水平に施されてゐるがごときは、全く嶄新な意匠である。

7 裝飾に全力を注ぎ、苟も適用し得る工藝は悉くこれを應用せよ。

例へば漆の色にしても、蠟色と云ふ黒いのもあり、辨柄と云ふくすんだ色もあり、純朱もあり、又朱と辨柄とを合せたものもある。又漆の上には、蒔繪を施したり、或は色彩を施したりして居る。蒔繪にも高蒔繪もあり、又平蒔繪もあり、梨地もある。こんな譯で漆にもいろ／＼種類があつて、最も鄭重な所は本地から仕上げまで三十回以上も塗つてあるものがある。又金箔や金具も夥しく使はれ、彫刻や繪畫も苟も施し得べき物には何にでも施されてある。

8 色の調和を主眼とせよ。

建物の一つ一つについて見ると、随分調和の如何はしいのが少くなくはないが、全体と云ふ事と、背景

の樹木の色とを考へに入れて、黒、白、金、群青、綠青、白綠、朱等の顔料を巧に配置してある。
9 工費は制限せず、工費を慮りて、意匠を粗略にすべからず。

例へば一坪に約十五萬圓を費したものがあつたものと云ふ事を以ても知られる。

以上九ヶ條の方針通りに凡てが施行されたならば至極結構であつたらうが、不幸にして、思ひ通りに行かなかつた事もある。就中耐久性に關して、例へば堅牢であると思はれた漆が數十年足らずで剝落したり、又内部の木材は自然に帯びた濕氣を發散する事が困難なために案外早く腐つたり、屋根も銅そのものは堅牢であるがやはり下地が案外早く腐朽して來るので、どうしても修繕が必要になる。それで今日に至るまで略二十年毎に修繕を繼續して居たが、三百年祭のために今年大修繕が落成した。

三、歴史的觀察

本邦の藝術は元來質素簡單で飾り氣の少いものであつたが、欽明天皇以後は佛教傳來の影響を受けて雄大複雑で變化の多いものとなり、殊に建築は直線的から曲線的のものとなり、材料固有の自然色に依り來たつた素木建築は華麗な人工的著色法に依りて色彩を施すやうになつて來た。降つて奈良朝の佛教が盛になつた頃には、其の建築も亦これに伴うて著しい發達をしたが、平安朝になつて顯密兩教が輸入されたために、剛健森嚴な形式が美術界に與へられた。所が平安朝の中頃宇多天皇の御代以後に遣唐使が廢止せられてからは彼我の交通が殆んど絶えたので、從來の模倣の時代は去つて咀嚼の時期となり、日本化された美術が現はれる様になつた。鎌倉時代になつては、禪宗の來と共に美術も其の影響を受けて恬淡清素な趣を帯びて來たが、足利時代の末に一層此風が極端となり、繪畫は濃彩よりも水墨を喜び、彫刻は精緻よりも雄勁で簡

淨の彫法を好むやうになり、建築は金殿玉樓よりも矮小簡素な草屋茅舎を珍重するやうになつた。然るに織豊氏の時代には前期の反動として豪華な美術が現はれ、殊に朝鮮征討に依つて大陸と接觸する機會を得てからは再び豪壯雄大な建築が起つた。これが美術史上所謂桃山時代と稱するもので、其の建築の特徴は要するに

- 一 全体の規模の宏大なる事
- 二 趣致の雄健なること
- 三 意匠の嶄新なる事
- 四 傳彩の濃厚艷麗なる事
- 五 稍通俗的傾向を帯びたる事
- 六 建築に繪畫彫刻を應用する事の頗る多くなりたる事

の六箇條に歸着する。さて江戸時代の初期は美術上前期の引き續きではあるが、幾分煩雜纖巧な傾向を帯びて來た事は誰でもすぐに氣のつくことであらう。然し、要するに、日光廟は其の江戸時代初期の美術の粹を蒐めた好標本として建築史上重要な遺物であると云ふ事が出来る。(文科二部三年)